No.52

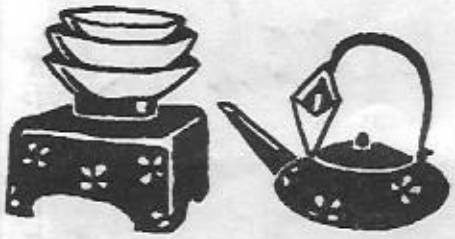
芥川だより

編集発行人　下村嘉明
発行所
☆　着物から服へ
着物から服を仕立てます
高槻市芥川町2－14－3
℡072－681－8870

発行日＊＊＊2010年12月1日　e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
皆様からの投稿をお待ちしております
http://www.justmystage.com/home/akutagawa/

＊＊＊＊＊＊＊＊＊　一部５０円です　＊＊＊＊＊＊＊＊＊

新春の宴・株講



季節感が感じられない街で暮らしているが、師走と聞くとなつかしく思い出す行事がある。私が育った田舎の風物詩のひとコマである。

村には、幾代にもわたり長年続けられていた『株講』という同じ姓を持つ者が新年の元日に集まり、親睦を深める習慣があった。２０戸足らずの村で我が家と同じ姓を名乗る家は、７戸あった。株講の当番は各戸持ち回りで、新春の集まりはその自宅でおこなわれた。当番になった家では準備に気を遣ったのものである。

我が家で株講をおこなう前の年の暮れは例年とはちがい、何かと気ぜわしい雰囲気であった。酒以外はすべて自家製で賄っていたので、畑や山で採ってきた芋や栗など料理に使う材料を準備しておかなければいけなかった。蔵から器やお膳を出してきて洗ったり、座敷の畳が古くなっていれば張り替えてもらったり、座布団を干したり、庭木を剪定したりと、ひと騒動であった。

元旦の早朝、株うちの家の主人たちが着物を着て新年の挨拶に来られるから、父はそわそわしながら坐っていた。６軒の主人達が挨拶に来て帰ったあと、すぐに株講の宴を用意しなければ昼に間に合わないので、いそいで配膳をする。丸い黒のテーブルを三つ並べ、七輪を置き、すき焼きの鍋をかける。にしめの鉢も並べ、盃を置く。すき焼きの肉は昨日父が自宅で飼っていた鶏を調理したものである。

昼前になると株講の主人達が米一升と肴を入れた風呂敷の包みを持ってやってくる。本家の主人が上座に坐り皆がそろったところで父が挨拶をする。続いて本家の主人の乾杯の音頭で宴は始まる。あつい茶碗蒸しを配り、熱燗の三合徳利を矢継ぎ早にテーブルに出し、家の者が客に勺をしてまわるのである。酔いが回ってくると盃から湯呑に代わり宴が盛り上がっていく。米や松茸の収穫など話は尽きない。耕運機を買った自慢話や出稼ぎに出た街のようすなど情報が少ない村にあって貴重な情報交換の場でもあった。

それぞれが○○ちゃんと呼び合い親戚同様の固い絆で結ばれていた。冠婚葬祭にあたっても株講の結束は強く、特に葬式の手配はすべて株講の人が取り仕切っていた。株講は煩わしい人間関係でもあったのだが、今思うと温かみのある村の原型をみる思いがする。(嘉)

連載　爺捨て山 25

梵店主

旦那が亡くなって元気になる婆さんは多いと聞く。重石が取れたように自由気ままな生活が出来るから自然と晴ればれして若返るのだろう。爺さんの世話をしている奥さんは、手間のかかる子供のようなものだと。ちょっと買い物に出かける時でも、「何処へいくんや、何時に帰る？」とうるさく聞く。少しでも遅くなると不機嫌な顔で待っている。こんな調子で四六時中監視されたらたまらないとぼやかれる。

男にも言い分はあるが、いかんせん家事を放棄してきた手前、ストライキをやられたらたちまち困るので妥協せざるを得ない。喧嘩などするものなら妻のいじめが始まりそうな気がするから何も言えなくなる。なさけない話だが男の弱さは歳を取るにしたがい強まる。

若い時には、老人になった自分を想像すらしなかったが、今になって考えると計画性が無かった。必ず老人になり死ぬ訳だから。晩年の計画をしっかり立て生きる事が大事だったのだ。行き当たりばったりでやってきて「とにかく元気に生きているだけでも幸せや」という感謝の気持ちは良いとしても、肝心の死に際を考えなかったら何の為の人生かと思うのである。特に男はその覚悟で威厳を取り戻したい。病院、医者任せでは情けない。

連載小説◆負けるな！よっちゃん 47

《ヒマラヤへの道 14》

ガルムッシュ峰 6

梵店主

一日休養した翌日、アタックキャンプを設営する為の装備を担いで予定地まで登った。先日見た氷原は一変してクレバスが無数に出来ていたのである。

びっくりしたのは大事な荷物が消えていたことだ。クレバスの割れ目の巾は一㍍を超え下を覗くとブルーアイスの割れ目がどこまでも続いていて底がみえない。落ちれば助けようがない。デポした荷物もきっとこの割れ目の中に吸い取られたにちがいない。それでも何も残っていない氷河の上を慎重に探したが、見つからなかった。失った装備は固定用ロープが三百㍍程とアイスハーケンなどである。テントや食料だったら大変だったが、ロープはまだ千㍍は残っていたので登山を続けられる。

よっちゃんは、氷河が刻一刻動き変化しているのだと思った。太陽が出れば氷がとけて川が出来るように大きな氷河は日々谷間を押し出されながらとけている。尾根に残っている残雪もいつ何時雪崩となって落ちてくるかわからない。天気も四日周期で変わってくるようだ。夏だと言うのに雪交じりの天気が続く。

五千二百メートルにアタックキャンプを設営し、高度に順応するために、ベースキャンプに降りず山猿とよっちゃんはアタックキャンプに泊まることになった。ベースキャンプとちがって寒いが、夕日が沈んでいく風景などは空気が薄いためか美しく見えた。山猿と夕食のカレーを食べテントの中を片付けていたら突然、よっちゃんは激しい頭痛に襲われた。高度障害である。抗生物質のカプセルを急いで飲んだが効き目がない。そのうえ下痢まで襲ってきた。フラフラしながら、陽がかげって寒さが強まり氷河の小川が凍りついたルートを降り出した。百㍍でも高度を下げれば楽になるかもしれないという思いである。

やっとの思いで少し降って岩陰に腰を下ろして休んだ。辺りが暗くなりかけているから長くは休んではいられない。人の身体は微妙である。少しだけ下がったのであるが、頭痛が和らいできたので急いでテントへ登って直ぐに寝た。夜中に幾度か下痢で起きたが頭痛はおさまった。

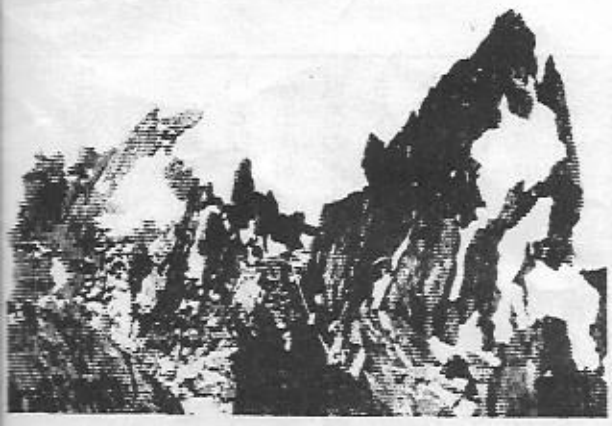
翌朝、ベースキャンプからきた二人と一緒に上部のルート工作に出かけた。隊長と由べえが先発し、よっちゃんと山猿が固定ロープを荷揚げする。スリップしたり雪崩で滑落したら助からないと思われる箇所に、固定ロープ張り、ユマールという金具を通して昇り降りするのである。使い方を間違わなければ大きな事故は防げるが、雪崩や落石が来れば防ぎようがない。

氷河に飲み込まれたロープが無くなったので、出来るだけ節約した使い方をしなければならなかった。アタックキャンプから南西稜を登るには切れ落ちた岩壁を登り稜線に出なければならない。出来るだけ登りやすそうなルートを探して登らなければいけない。今後の荷揚げの事を考えても安全で楽なルートであってほしい。

先発の二人は、岩壁の中に斜めに走るバンドに沿ったルートを見つけて登っていく。頭上には懸垂氷河らしき氷塊が横たわっているが落ちてこないことを祈るだけだ。四十㍍余りの岩登りを終えると少し傾斜が緩くなった氷の上に雪が積もった稜線にでる。この稜線は傾斜が四十五度ぐらいである。この斜面は雪崩が起きる可能性があるので怖いのだが、ルートのとりようがないから真っ直ぐに登る。

テントが張れそうな箇所がないから斜面を切り込んで整地してテントを張ることにした。風をまともに受けて飛ばされるかもしれないので、テントの張り綱を補強し、夜寝るときには、ザイルで確保しなければならない。そんな危険な場所ではあるが、見晴らしは素晴しかった。今晩は、五千七百に設営したアタックキャンプⅡには誰も泊まらず隊長と由べえは五千二百に泊まり、よっちゃんと山猿は四千七百のベースまで降ることになった。

よっちゃん達の貧乏遠征隊は、金の都合で炊事道具を節約したので二セット分しか持っていなかったので、ベースキャンプ以外のテントに泊まるときは持ち運びする必要があった。このような些細な荷物が高所では大変な苦痛をもたらすのである。五千㍍を超えれば空身ですら登るのが大変であるのに、二十五キロにもなる荷を担ぐのは大変だ。進まない一歩を出すのがほんとうにつらくなるのが高所登山の現実である。しかし、慣れてくると楽になるのも事実である。



もろい岩に雪の交じった岩稜にルートを拓く

「親バカ」

明石　幸次郎

先日、初孫が生まれました。産院で自分の子供から生まれた子供を初めて見て、これで自分の血が繋がったという嬉しさと、何かしら、生きることのエネルギーを感じ、癌を患っている友人が、孫を抱くと不思議と生きるエネルギーが湧くと言っていたことを思い出しました。

娘が産院から退院して少し落ち着いたので、ドイツに居る息子が自分にとっての生まれたばかりの姪がどんなのかを見たくて、パソコンからスカイプ（パソコンに専用のイヤホンとカメラをセットし、双方の画面と声が聞けるという双方通信）しようと言うことで、娘が赤ちゃんを抱いて、遥かかなたの弟とスカイプで話をしたらしい。パソコンでこんな事が出来るとは、しかも無料で、世の中便利になったものです。息子はパソコン上の小さな画像に見える、生まれたばかりの赤ちゃんと対面して、いたく感動したようで、この印象を自分のブログに載せたらしく、このブログを見た東京に居る2番目の息子がこれを知らせてきました。ドイツで苦労しながら、好きな音楽を続けている息子が生きる事の大事なものを掴んでくれたような気がして、親バカを承知で息子の書いたブログを少し長いですが、紹介致します。

“新しい命と消えかける命”

昨日の夜、僕の始めての姪とスカイプで話した

僕はドイツにいるので実際日本は早朝8時くらい

姪は産まれてまだ9日なので話はできないけど彼女の姿を見た、目に焼き付けた

9日前にこの世に産まれ落ちた姪は僕の姉の娘で名前はフウちゃんというらしい

電話をしてる間とても不思議な気持ちだった

はかなく消えそうに小さいこの赤ちゃんは手も足も耳も目もすべてのパーツが完全にそろっていた

必死でお母さんに何かを訴えかけるように奇声を上げている、足をばたばたさせている

そのすべてが不思議で仕方なかった

姪はもう有機的エネルギーの集合体そのものだった

スカイプで話している間、おなかが空くとフウチャンはお母さんのおっぱいをねだる

お母さんが指をしゃぶらせるとそれをおっぱいと間違えてしばらくアムアムしてるのだが何も出ないので何かおかしな顔になって、そのうち泣いてしまう

その細かい表情の一つ一つがしっかり海を超えて伝わって

僕はもうこのテクノロジーに感謝するしかなかった

そして何よりこの小さい生き物に産まれてきてくれてありがとう

ここはきっとすばらしい世界なはずだから

同じ日に僕は駅であるジャンキーと会った

ジャンキーなんてドイツにはたくさんいるけど僕は彼を知ってたし彼も僕を知っていた

日本からデュッセルドルフに越してきた頃、仕事がまったく見つからなかったので仕方なく駅前のクレープ屋でバイトしていた

しかも夜中の12時～朝の8時までの夜のシフト

今からするとよくそんなバイトをしたなと思うけど、とにかく金がなかった

その頃彼と出会った。彼は僕の店の客だった

彼は基本的に90％あっちの世界にいる人なので、ほとんどまともな事を話さないけどたまにはっとするような事を言った

彼と親しくなる内に僕は彼に残飯をやるようになっていた

何となく軽い気持ちで、「まあ食ってよ、どうせ誰も見てないし、こんな時間帯に」という感じで―――

けどそれをある日駅で働く職員に見られてしまった

彼は僕の働く店のボスの友達だった

あっと言う間にボスにチクられ僕はバイトを即座にクビになった

そのころのジャンキーの姿を2年ぶりに見た

彼は確実に死にかけていた

目は落くぼんで、体は棒のように痩せ細り、目からはもはや生気というものが感じられなかった

寒いドイツの路上で暮らす麻薬中毒者は2年も生きられない事が多いらしい

この人はもうすぐ死ぬんだろうなと思った

僕はなぜか彼と話すのをためらった

おそらく話しかけても僕の事を覚えてなかったかもしれないけど

そんな事があった夜に僕は姪の姿をみた

死にかけている彼に比べて今しがた産まれてきた姪はなんて美しく瑞々しい存在だろうとおもった

ジャンキーの彼も昔は姪みたいにきれいに産まれてきたはずなのに

どんな運命が彼をくるわせたんだろう

どこで一人ぼっちになってしまったんだろう。

義兄とその家族（12）

肺ガン末期を宣告された義兄の闘病記、というより「生きた証」を書かせてもらうつもりだったものが、いつのまにか姉の介護暴走日記になってしまっているが、本当に、我が姉はケッタイな「ねえちゃん」なんである。

ケチで始末屋だったのに、湯水のようにお金を使って、免疫療法や高濃度ビタミンC療法などに義兄を駆り立て、朝から晩まで、ニンジンジュースだ、プロポリスだ、タヒボ茶だと奔走していることは、すでに何度も書いた通りだ。姉の決まり文句が「死んだら、お金は使われへん」だ、ということも。

義兄は会社に行かず（傷病手当か何かをもらっているようだ）、すでに1年4カ月休職している。「何とかいう手当も、いつ切られるか、わからへんけど、○○（義兄の名前、呼び捨て）には何も言うてへんねん。言うたら、心配するやろ」と電話で、姉は小さい声で私にしゃべる。そりゃ、心配するのが普通だ。でも、姉は「余計なことは耳に入れたないねん。だって、どっちにしても働くのはムリやもん。今、働いたらガン再発して死ぬと思うし、な」。

普通に考えたら、かなり心細い経済状態だが、姉はそのように思っていない。どういう脳の仕組みか、私にはわからないのだが、「よっしゃ、それならお金を使いまくろう」と決めたようなのだ。ただし、手持ち金の半分、という限定で。

「そのお金を使いまくって、それでも義兄を助けられなかったら、それはそれで仕方がない。でも、何もしないで、このまま、あの世に義兄を送ったら可哀想だし、自分にも悔いが残る」、そんな風に姉は思っている。そうとしか考えられない。

姉は、四国に転勤する義兄についていくと決めたとき、八尾に貸金庫を借りた。四国にいちいち家の大切な通帳などを持って行くのが面倒だからといっていたが、その貸金庫に貯金の半分をおろして、放り込んだ。義兄が入院してまもなくだったと思う。最先端医療を受けさせたいと決意していた姉は「手元にお金がなくて、そっちへ行かれへんみたいなことになったら、イヤやから」と言っていた。

最先端医療といっても、病院なのだから、診察当日に何百万も払えと言われるわけはないと、私は思うのだが、極端な解釈をする姉は、大金をカバンに入れて医者に見せないと診てもらえないのではないか、ぐらいに思っている。「1千万、用意できているんですね。では、診ましょう」なんてことはないに決まっているのに、貸金庫に1800万円を移した。「イザいうときに、定期の解約に走ったり、郵便局に行かなあかん、なんてことがないように」と、姉は妙に準備がいい。

「これは老後用のお金の半分やねん。貯金の半分は○○の分やから、○○が使ったらええねん」。そもそも全額、義兄が稼いだお金だが、ちゃっかり半分を自分の分とみなしている。「もし、○○が死ねへんかったら、私の分を使わせたげなあかんやろ」。そりゃ、そうだろうけど。

見方を変えると、姉は1800万円で義兄の病気を治そうとしている、とも受け取れる。もともと、家計簿の鬼である姉は、「成人病センターと四国の病院にこれまでに払ったお金の総額が170万円、高濃度ビタミンC療法が1回1万5千750円で、週に2回。月に8回から10回やね。それに、今でも成人病センターで注射してもらってるから、月に払うお金が2万5千円から3万円の間。これまでに、免疫療法に払ったお金が26万円で、これは途中で断念したから、ドブに捨てたんと同じやけどね」とスラスラ数字が口をついて出てくる。

「それに、ニンジンジュースが月に4、5万はかかってますねん。ニンジンだけやなくてリンゴと国産のレモンを入れてるから。とくに国産のレモンが手に入りにくくて1個198円ぐらいするねん。それが日に3個や」。前にも書いたが、姉は有機栽培のニンジンを産地から取り寄せているが、箱入りを週に2回、配達してもらっているらしい。朝・昼・晩と義兄と姉の二人で300CCずつ飲んでいると、実際に4、5万円という金額になるそうなのだ。ちょっと信じられない金額だけど、姉の過大申告ではないと思う。家計簿の鬼は、常に数字に忠実だからだ。

私がこんなことを書いて「芥川だより」の読者に公表しているなんて姉は知らないし。仮りに知ったら、レシート付きで1円単位まで細かく情報提供してくるのが姉という人だ。「月によって金額が違うねん。夏場はリンゴが高いけど、今は安いしな」といつも、やたら細かく教えてくれる。

義兄の使える1800万円のうち、すでにどれぐらい使ってしまったのか、怖くて聞けない。「あと残り300万円ぐらいかな」などと言われた〈

ら、ぞーっとしそうだ。

もっとも、そんなに使い果たしてはいない気がする。どちらかというと、まだほとんど手をつけていない状態かもしれない。姉が口にする「1800万円」という金額が目減りしていかないからだ。

それに、姉はこんなことを言って、義兄をうろたえさせていたからだ。「なあ、二人でドイツ行けへん？　1週間や2週間の旅行では往復の飛行機で体にダメージ受けるから、1年ほど向こうにおろか。1千万円ぐらいあったら、1年ぐらい暮らせるんちゃうん？。死んだら、お金は使われへんねんから」。

義兄は弱々しく首をふって「行かない。僕、そんなにすぐには死なないような気がするから」。姉は私に「気ぃ小さいやろ。1千万円ぐらい使こたらええねん、自分で稼いだお金やねんから」。姉の金銭感覚の暴走は止まらない。

（AO）

異聞・幻のストラディヴァリウス③

虚しい、というより、暗く冷たい闇の中にいるような重苦しさをニコロは感じていた。この上ないような快楽の極みに達した後は、とりわけ重苦しい。何とも表現しようもない虚無感だ。光のとどかない無明の世界のようだ。それは、性の快楽の先に生殖があるからなのか。新たな生命を産みだす苦しみの始まりなのか。

侍女に湯を張らせておいたバスタブにソーニャが入り、湯浴みをはじめた。ときをおかず、ニコロがソーニャの後ろに滑りこむように入る。

外からヴァイオリンの音が流れてきた。「ロマには感心するほどの技巧を持つヴァイオリニストがいるわね。もちろん、あなたほどではないけど」と少し振り向き加減にソーニャが話しかける。

ニコロは後ろから彼女の身体を抱きしめながら「いま弾いているロマはたしかにうまいが、私はどうしてもジプシー音楽が好きになれないんだ。テンポの変化や音の強弱が激しいが、胸の奥に響いてこない」といって、ひとつため息をつく。ソーニャは小さな声で「私も」とうつむいた。

ソーニャの向こうにマリーナの面影を見たニコロは、マリーナとの別れのときを思い浮かべていた。

＊

十八歳のときからいっしょに暮らしたマリーナとの生活は、甘美な歓びに満ちていた。何かに憑かれたような烈しい恋だった。ニコロは恋の彼方にマリーナとの幸福な生活を夢見ていた。

四十七歳のいまから振りかえれば、それは単なる夢、幻想であり、現実にはありえないことだということがよくわかる。それゆえ、ひとりの娘を育てながら農園経営につとめるという日常生活をもつマリーナは、ニコロへの愛を変質させたのだ。

その変質に若いニコロははじめは戸惑い、愛が冷めてしまったように思えた。否、むしろ、マリーナはニコロとの生活を幸福なものにしようと徐々に自分が変わっていったのだ。ニコロとの新しいつながりを求めて。

初めて出逢って、烈しく交わり、いっしょに暮らしはじめるまでは、マリーナは魔性の女であった。生活を共にしはじめると、母性をあらわにする。娘のナターシャに接するときはもちろん、母性が日常なのだ。そういう日常性の中では、魔性は異常となる。母マリーナと娘のナターシャ、彼らと過ごす日々の生活は、ニコロにとっては新鮮であった。

十代から鍛え上げたニコロの肉体は、鋼のように強靭であった。

なれない農園の仕事もマリーナとこなした。苦労よりは楽しさがまさった。

ナターシャとの遊び相手も喜んでやった。ナターシャはニコロによくなつき、受けいれていた。

ほとばしる若い情熱はマリーナに向けられた。マリーナもそれを受けいれ、二人は性の陶酔に酔いしれたものだ。

またニコロは、一日十時間以上はヴァイオリンの練習に取りくんだ。演奏方法を工夫し、思い通りの音が鳴るまでくり返し何度も練習に励んだ。弓の持ち方、肘や肩、肩甲骨の使い方を工夫し、理想の音に近づける努力を惜しまなかった。この天才の努力は、その見返りに悪魔に魂を売ったといわれるほどの超絶技巧を生むのである。

その上達ぶりを間近で見ていたマリーナは、この若い天才ヴァイオリニストを世界に解き放たねばならない、ニコロとつながりを解消しなければならない、と決心する。

ニコロ・パガニーニ（1782-1840）

連載　京鹿子幻影　3

具志　清

三　曹源池

拝啓　とてもとても嬉しゅうございます。

高井様から、こんなに早くお手紙を頂けるなんて思っておりませんでした。わたし、勝手なことばかり書きましたので、お気に障りはしなかったか、と心配しておりましたのですから。それがとても有難いお言葉を賜り、ほんとに感謝いたしております。

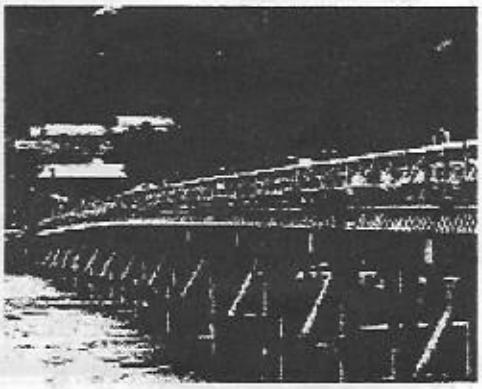
あの日、お別れした後、翌日の夕方京都を発つまで、お礼のお電話をおかけしよう、と思ったのですが、なんだか気が引けまして、帰ってから御礼状を差し上げよう、と考え直したのです。

お手紙嬉しいのですが、恥ずかしいですわ。

黒田清輝の名画の女性に譬えて下さって、ほんとに身に余る光栄です。でも、わたし、そんなに上品ではございませんですよ。わたしの頭、唯、簡単に丸めて束髪のようにしているだけです。パーマが面倒なのです。要するに、ずぼらなんです。母に、よくそう言って叱られたものです。

あの着物は母が愛用していたものです。京都の総鹿子絞りです。戦時中、母が買った時は結構値がしたようです。母は大事にしていました。嵐山で父と最後に会った日に着ていました。でも、もんぺを付けていました。当時は、もんぺの着用無しに着物を着て街を歩くと、非難されたそうです。コートとショールは、わたしが古着屋で求めたものです。ですから全身セコハンなんですよ。あの日は、ボストンバックに和装一式を詰めて東京を発ちました。そして京都駅前の旅館で着替えて外出しました。母の形見の京鹿子を着て嵐山へ行きたかったのです。

嵐山の雪景色は素敵ですね。川岸にぼんやりと立っていたわたしを見て、さぞ変な女、と思われたことでしょう。わたし暫くそこにいて、また渡月橋に戻り、今度は川を溯って歩きました。百米ほど行くと長い堰が向こう岸まで続いていますね。こちらは中州や川瀬に葦や川草などが繁茂していますが、向こうの方は湖のように広がっております。山あいの奥は保津峡ですね。わたし、一度、その渓谷を越えてきた事があるのです。生まれてから中学を出るまでは祖父母のもとを離れた事はありませんでしたが、卒業すると母が東京から引き取りに来ました。その時山陰本線で嵐山を通り過ぎました。母は途中下車して京都を、わたしに見学させようと、考えたのですが、母は



渡月橋

その頃、物心共に余裕がなく、またの機会に、と思い直しました。しかし結局は貧乏暮らしの母子には、それは叶いませんでした。京都駅で乗り換え東京へ直行しました。母と二人で汽車の窓から、このあたりの山並みを眺めたことを思い出しました。

川端から右の路地へ入ると直ぐに左手の道脇に、小督（おごう）の墓を見つけました。今度の嵐山行きで訪れたい、と思っていました。小さな悲しげなお墓ですね。平家物語の中の、小督の哀切なものがたりに、なんともふさわしいお墓ですね。

「峰の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か、おぼつかなくは思へども、駒をはやめてゆくほどに、…」

仲国が、駒を止めて耳を傾けた小督の爪弾く想夫恋の調べが周辺の樹々の間から聞こえてくるような気がしました。平家物語は全部は読んではおりませんが、小督局の章は、わたしの愛読の文章です。

小督のお墓にお別れしたあと、路地を辿って行きました。雪交じりの土砂の道は鄙びた雰囲気があり、情緒があります。車社会の最近は、コンクリートやアスファルトで固めた道が多くなってきました。京都は、せめて嵐山のような風光明媚な土地だけでも自然の道をいつまでも保ってほしいものですね。路地を二、三度折れて行くうちに、天龍寺の境内に出ました。鬱蒼とした樹木の間に大きな御堂が現れました。「選佛場」と大きな横額が掛かっておりました。石段を上り入口の格子戸から薄暗い内部を覗いてみました。天井の全面に描かれた巨大な龍にびっくりしました。爛々たる龍眼に自分の心の中の魔性を見透かされているようでした。

高井様と、その御堂の横でお会いしたのですね。あ、あの変な女だ、と思われたでしょうね。

天龍寺の曹源池を、父は、日本の庭園の極致、と絶賛していたそうです。

池のほとりに佇んでいると、暗い時代の僅かな時間をこんなにも静かな所で、語り合った父と母のそれぞれの胸中を想い、目頭が熱くなりました。

ひえびえとした池の面に小さな波紋が生じ、底の方から雲のように湧き出た濁りの中を赤と黒の二尾の鯉が寄く

り添いつつ泳いでゆきました。

この庭園は夢窓疎石という偉いお坊さんがお造りになったのですね。わたし、お寺やお庭に関してはよくは知らないのですが、このような美しいものを遺して下さった昔の人々を尊敬いたします。

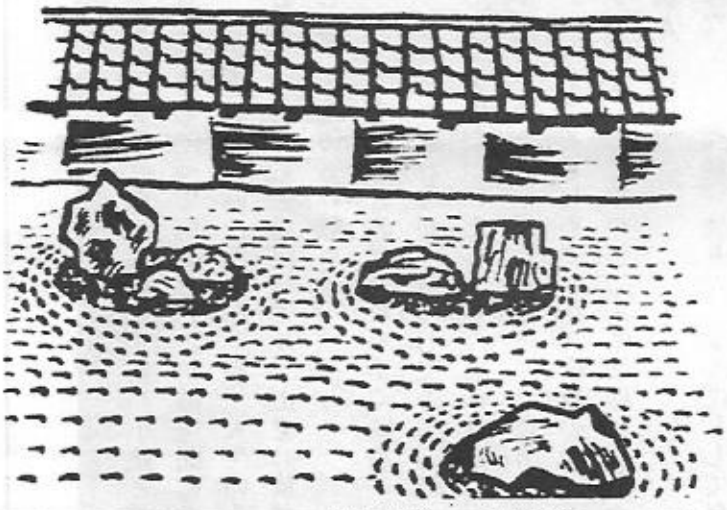
お庭のあと、境内をぶらぶらしました。塔頭寺院の門構えなどを見て歩くのもいい気分になります。妙智院（西山艸堂）の門の脇に「湯とうふ」と墨書が掲げてありました。丁度お昼どきでしたので、賞味することにしました。小さなお庭に面した広いお部屋へ通されました。先客に婦人の三人連れがいました。わたしは一人、片隅で、しばし京都情緒に浸りました。

高井様と、また駅前でお会いしたのですね。わたし、ほんとに、あれ、とびっくりしました。偶然ですものね。まるでお約束していたようですものね。わたし、嵐山へは四条大宮から電車で参りました。そして帰りに龍安寺へ、と予定していました。

高井様とご一緒させて頂いて、わたし、ほんとに良かったと思います。いろいろと教えて頂きました。こちらでは京都に関する本などを集めて勉強はしておりますが、大変参考になりました。わたし、龍安寺へ行くと申しましたが、その前に、父が下宿していたお家を捜しました。その御屋敷はすぐにわかりました。でも中へお邪魔する気はありませんでした。唯、父が住んでいた場所が知りたかったのです。

高井様は京都のお寺やお庭にお詳しいのですね。お名刺に商事会社とありますが、お寺に関係のあるお仕事でしょうか。わたしは、あの時、急にお名刺を頂いて、うっかり名前も申し上げずにお別れしてしまいました。わたし、料亭で働いております。

お話したい事がもっともっとあるのですが、大変長々と書いて参りましたので、これで失礼いたします。一層御健康で御活躍下さい。　かしこ



携帯エッセイ26

「日記」

最近、日記を付け始めた。主な目的は惚け防止の為である。

私の伯母は98歳で亡くなるまで日記を付け続けた。惚けは全く無かった。話の内容は四つ年下の私の母のより、しっかりしていた。

『日記はきっと脳に良いんだろうなぁ～』と思っていた。

最近、始めた切っ掛けはポメラという携帯ワープロを使い出してからである。これはパスワードを設定できるので、他人に読まれる心配がない。

30年ほど前に妻に読まれて日記を止めた経験がある。その頃、文章修業の為に日記を付けていた。五年間ほど付けた。文章力は上がり、手応えを感じていた。

しかし、ある時、妻が「あなたの日記、面白いわ」と悪びれず、しらっと言ったのだ。妻は私の日記を読むのに何のためらいも、罪の意識もにないようだった。私は呆れた。それ以来、日記は書けなくなった。

妻は「最近、なんで日記を書かかへんの？　面白いのに」と残念がった。

私は「そのうち書くよ」とはぐらかして置いた。怒りはしなかった。理由は、女性は肉親の秘密を知るのは当然の権利と考えている、節があるからだ。

思春期の頃、彼女から貰ったラブレターを母に読まれたことがあった。また、私の長女は長男の携帯電話を盗み見して妻に報告していた。

「お母さん、お兄ちゃんに彼女いるみたい。着歴いっぱい入ってる」

長男は未だに、このことは知らない。

《龍》

俳句

土田　裕

○久々に訪ふ名苑に石蕗（つわ）の花

○父母の遺影の並ぶ冬座敷

○数え日や駅の珈琲立ちて飲み

○街路樹に青き電飾十二月

○灯が街を透明にする寒の内

連載　女８０年の軌跡　眞糀さん

人生の折り返し

皆四十代、五十代、自分の子供を見て、年令的には人生の折り返し点に来ている。

年老いてゆく親を間近に見、自分も見つめ、そして成長して親から離れようとする。子供達との摩擦、夫婦間の馴れ合い。仕事上の責任、経済的な不安。若い頃には想像もしなかったことが束になってのしかかっている。

大事件ではないけれど、かなり切実な問題ばかりである。でも、他人事とは思えないことばかり、残念ながら、人は多くのものを同時に抱え込むことは出来ない。何かを得れば、何かを手放すことで別の大事なものを守ることもある。

昨今、毎日のように報道される悲惨な事件を目のあたりにすると、今の世の中救いようがないのか。イヤ、様々なる情を抱きかかえて生きているのはお互い様である。

ならば共に生きていく以上、お互いの気持ちを理解し、努力することではないだろうか。その結果で、どうにもならなかったら、ほっとけ、仕方がない。よーく考えよ。いつか心に通じ合うものだろうか。待ってみよう。

きずな

夫婦げんかもなく、姑、小姑との仲も至って円満とどこかの空間に書き入れてみたかった。夢、人生いろいろから苦労が始まり、山家の猿だから何もわからない。

チョイとおだてりゃすぐ踊る、と指さされながら暮らしてきて、やっと気がついたら、主人もいないし、子供だけ。涙なんかとっくに日焼けしてあきらめました。会話のない人でした。やっと二人になれたと思ったら。

うつ病、独りでしょんぼりして坐っている姿を見たとき、この場でやさしい言葉でもと思ったが、出てこない。出るのは、ため息「ハアー」

「なんでこんなことになったん、胸の中に、私に言いたいことといっぱいあるんじゃろう」

いい残したいことも、私も聞いておきたい。とうとう一言も涙だけ一筋頬を伝って流れてきたのを見たとき、これが私に対するコトバだったのか。

常日頃から、こんな生活だったから、すぐノートに書きなぐることが日課になった。スーッと不思議に気持ちが落ち着いてくる。今は、ミカン箱に納まっているけれど、いつかは、始末しておかないと。

バアさんの泣き字とかと思ってくれたらよいとこ。

不用品、ゴミ、ゴミ捨てちゃえー。おばはん、このシャツ着られるぜ、と言う洗濯の不注意でピンク色に変化。パジャマ用にして着ますわ。

早速着用してみたら安眠、朝までぐっすり。古着もらって笑い、憂いの心がうすらいで静かに幸せがよって来たみたい。

指

指は五本とも違っている。親指と小指、親指と人差し指をくっつけるとお金を意味する○印。親指は親分、男性。小指は女性などの合図になる。指は五本共爪の数、間接の数も大して違わないけれど、それぞれ違う。それでいて、コップを持ったり、じゃんけんでグーを出したりする時には、みんなでまとまった動きをする五本の指です。一つづつ違ってないから協同作業ができるのかな。

今、鉛筆をにぎっている右手、五本共力を合わせている。左手は原稿用紙が動かないように支えている。自分の指の動作をながめていると自然に心の落ち着きが出てくるとは妙なもの。

編集後記

今年も師走になってしまいました。何もしていないのに、時だけは早く過ぎ去ってゆきます。何もしなくても一生、泣いて暮らすも一生、笑って暮らすも一生。どうせなら楽しく暮らしたいものです。

＊お知らせ

来春２月13日（日）昼から「芥川商協会館」で、芥川だよりの初の懇親会を行ないます。飲み物等をご持参頂き、これまでの芥川だよりを話題に楽しい時間を過ごしたいと計画しております。皆さん、お気軽にご参加ください。無料です。（嘉）

『人気のデザイン』５
キルティングコート
＊
着物地にキルト綿の裏地を付けると軽くて暖かいと好評です

正月休みのお知らせ
１２月３０日～１月４日
着物から服を仕立てます
梵～ぼん～